

◇アジアの仏教国との交流を◇

東南アジアの上座部仏教国タイ。そこで一度、修行した体験を持つ日本の僧侶も少なく



タイの僧院

ない。黒田武志住職もその一人だが、このほど、そうした人たちの集まりである「日本パクナム会」の会長に就任した。前会長の石附周行氏（曹洞宗雙林寺住職）らとともに発足当初の九年ほど前から会の運営を担ってきた。

黒田さんが初めてタイに渡ったのはベトナム

ム戦争最中の昭和四十年。バンコクのワット・パクナムで二年ほど修行し、上座部仏教というものを肌で感じとった。「現在の日本の仏教は形が崩れてきている。在家の人とどこが違うのか。日本の僧侶は上座部仏教の僧侶ほど民衆から信頼を得ていない」と指摘する。

タイでの修行の後、今度は戦争当事国であるアメリカに渡った。当事の日本はアメリカよりの外交政策を採っていたが、「日本はもつと中立で、アジアを救う立場に立っていれば」と今も思うという。

昨年、日本パクナム会は日タイ交流の地であるワット・パクナムに仏教書などを贈り、日本文庫を開設した。会員や趣旨に賛同してくれた学者や出版社、仏教伝道協会などの協

力もあつて五百冊を贈呈、タイ在住の日本人にも開放されている。また一方では、日本の学僧を海外へ派遣したり、海外の留学生を受け入れる「善光寺海外留学僧派遣育英会」を運営。過去七年間で九カ国に三十五名を派遣している。派遣先はタイとは限らず、アメリカやヨーロッパへも。

二十代のころ、日本一周の托鉢を行ったこともある。野宿も経験した。海外での修行やこうした貴重な体験が留学僧派遣などの様々なアイデアを可能にしているが、すべては人作りにつながっている。

「本当の仏教というものを後世の人々に伝えていかなくてはなりません。そのためにも仏教を形と心が一体となったものになんては。次の世代を担う人、頑張つてやってみようという人たちに力を与えているんです」

数年前、自分の子どもをタイ仏教の方法で得度させた。親子揃つての体験だった。「自分がやってみて良かったですから、ぜひ子供にも同じことを体験させたかったですね」と「親心」をのぞかせる。

黒田さんはアジアから世界へと絶えず海外に目を向けて行動する。日本人の話題はアジアよりも専ら欧米に関することが多い。もっとアジアを見る必要があるという。

「悲しいことですが、アジアの仏教国が力を失ってきています。今こそ日本の仏教人がアジアの同じ仏教国に力を捧げなくてはならないと思うんです。今はタイの仏教に焦点を当てて活動していますが、その力をアジア、そして世界へといろんな国々に及ぼしたいですね」